

キリスト者はしばしば、「神様の御心はどこにあるのだろうか」と迷う。いくら祈っても、御心が分からず、途方に暮れる時がある。いわゆる「御心症候群」である。こういう状態に陥るのは、そもそも、神の御心に対しての勘違いがあるのではないか、筆者は本講演においてそう問いかける。この講演は、2003年に大野キリスト教会の教育セミナーで語られたものを、一部修正加筆したものである(2013年10月)。

御心症候群からの解放

創造的で自由な信仰生活を楽しく送るために

ごあいさつ

今年も大野教会の教育セミナーにお招きいただき、主に心から感謝しております。

今回は、「御心症候群からの解放」という、ちょっと聞きなれないテーマで講演したいと思います。この講演を聞いていただければ、キリスト者はこうあらねばならないという縛られた考え方から解放され、創造的で自由なクリスチャン生活を送ることができるようになりますと確信しております。

皆様お一人お一人の信仰に大きな益になりますようにと、祈りつつお話させていただきます。

1. 神の御心が分からないで悩んでいるキリスト者

始めに、この講義のための聖書箇所を、司会者にお読みいただきたいと思います。ピリピ人への手紙1章9-10節をよろしく願います。

私は祈っています。あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになりますように。(ピリピ 1:9-10)

この箇所の中で、「真の知識とあらゆる識別力」と「真にすぐれたものを見分けることができる」という二つの句に心をとめていただきたいと思います。キリスト者生活において、「知識」とか、「識別力」とか、「真にすぐれたものを見分ける」というようなことが重要だと言われています。よく、キリスト者にとっては「愛」が大切だと言われます。その通りです。ここでも「愛」の大切さが説かれています。ところが、その愛は、「知識」とか「識別力」に関係しているのです。あるキリスト者たちは、愛と知識や識別力とは矛盾するかのようになっています。しかし、決してそうではないのです。

では、今日の講義「御心症候群から解放される」というお話に入っていきます。キリスト者であれば誰でも、神の御心に従いたい、あるいは従わねばならない、そう思っていると思います。そんなことはいつも聞かされていることで、もう分かっているという人もいるでしょうし、御心に従えないで悩んでいるんだ、またかと思われる方もおられるでしょう。今日は、「御心」という言葉に何となく拒否反応を示される方々を念頭に置いてお話を準備してきました。アレルギー現象を起こさないで、ぜひ期待をもってお聞きください。

神の御心について考えるとき、キリスト者にとって一番大きな問題は「従いたい」とか「従わねばならない」とか「従えない」ということではありません。こういう「従う」という自分の問題というより、「御心とは何か」という神の側の問題が一番大きな問題なのだと思います。つまり、そもそも「神の御心」が何であるかが分からないから、こういう問題には関わりたくないのだと思います。

しかし中にはまじめなキリスト者もいて、神の御心はどのようにしたら分かるのだろうか、聖書の中にきっと答えがあるに違いないと聖書を調べたり、いろいろな書物を読み始める人もいるでしょう。祈りをすれば神は御心を教えてくださると信じ、熱心に祈る人もたくさんおられるでしょう。周りのクリスチャンを観察する人もいれば、先輩のクリスチャンに相談される方もおられるでしょう。これらは皆、とてもすばらしいことです。もしそのようにして神様の御心が分かった人がいたら、その人の信仰はとても素晴らしいと思います。そういう歩みを続けていってもらいたいと思います。

しかし、皆様の中には、そういう人ばかりではないと思います。そのようなことをいろいろ試みたけれど、結局現実の具体的な問題に対する神様の御心は分からなかった、そういう経験をお持ちの方もいらっしゃるのではないのでしょうか。私の牧師としての経験から言うと、かなりの人々が「神の御心が分からないで悩んでいる」と感じております。

もう数年前のことで、シンガポールで経験したことです。礼拝後に一人の若い女性が相談に来られました。「自分は今転職を考えています。自分のしたい仕事は香港のある会社にあるのだけれど、それが神様の御心かどうか分からないで悩んでいます。どうしたら神様の御心は分かるのでしょうか」と質問されました。

私は、一瞬返答に詰まってしまいました。そして、「あなた自身は行きたいと思っているんですか？」と逆にお尋ねしました。すると、「はい」という答えが返ってきました。「じゃあ香港に行って、状況を調べてみたらいかがでしょうか」と申しあげました。すると、「先生、そんなに簡単に決めていいんでしょうか？」という返事が返ってきました。そこで私は、「それでは、もっと複雑な、どんな方法で判断するようにお勧めしたら、納得してくださるのでしょうか？」と再びお尋ねしました。

そのときまで彼女は、神様の御心であれば、祈ればきっと神様から何らかの示しがあるに違いない、そう思っていたようです。御言葉が与えられるということか、幻や夢を見るということか、何か別の何か分からないけれど、とにかく何か特別な啓示か、宗教体験があるはずだと期待していたのです。むろん、そういう経験をもっている人のことを私もたくさん知っています。けれども、そうではない仕方でも導かれる人々もたくさんいます。率直に言えば、そういう特別な体験をした人たちは多くはないと思います。

使徒の働きの記録を見ても、そういう特殊な宗教体験は、パウロにとっても、ダマスコ途上でイエスにお会いした経験(使徒 9:4-9)とか、ヨーロッパの人々の叫びを幻の中で聞いた経験(使徒 16:9-10)ぐらいでしょうかね。あるいはペテロにとっては、汚れた食べ物を食べるようにと幻を示された経験(使徒 10:11-16)ぐらいでしょうかね。私自身も、そういう経験はほとんどありません。しかし、よく祈ってからですが、自分が一番良いと思う道を選びました。そのようにしていつも神様の御心を行って来ました。

そんな話をさせていただくと、彼女はほっと安心したような顔をされ、喜んで帰っていかれました。

それから一か月後、香港からメールをいただきました。そのメールには、あの時、香港に行ってみようかと決心して本当によかった。香港では主がどれほど素晴らしい道を彼女に備えてくださっていたか、お仕事の事、信仰の事、教会の事がたくさん書かれていました。

彼女のようなケースは、決して特別なものではありません。皆さんの中にも、彼女と似たような経験をお持ちの方も大勢いらっしゃるでしょう。祈っているけれど、神様の御心がどうしても分からない。進むべきか、留まるべきか、祈れば祈るほど袋小路に入ってしまう、そういう経験を続けていると、信仰そのものまで分からなくなってしまう、そういうことがしばしば起こります。そして大抵は、特別な神からの示しはなく、時間切れになってしまい、まあこれでいいか、と見切り発車をせざるを得ない状況に追い込まれます。

選んだ結果、良いことが続くと、やっぱりこの道は神様が備えてくださった道なのだと確信します。ところが悪いことが幾つか続くと、あの時自分は神様の御心から踏み外してしまったのではないだろうかと不安になります。そして、次第に自分の信仰に確信がなくなり、自分が御心の外を歩んでいるような錯覚に陥ってしまうことがあります。

キリスト者は、いろいろな機会に神様の御心が分からず、悩むとか、迷うとか、困るという経験をするでしょう。いくつか例を挙げてみましょうか。

若い人であれば、どこの学校に行ったらよいのだろうか？

就職すべきだろうか、それとも進学すべきだろうか？

どんな仕事を選んだらよいのだろうか？

あの人と結婚することは神の御心なのだろうか、それとも別の人を待つべきだろうか？

今の職場を変えて、新しい仕事にチャレンジしたいのだけれど、それは御心なのだろうか？

教会を変わることは御心だろうか、それとも頑張っただけで留まった方がよいのだろうか？

教会で頼まれたご奉仕をすべきだろうか、断ってもよいだろうか？

教会のあの人をケアすべきだろうか、他の人に頼むべきだろうか？

あの人にこのことを忠告すべきだろうか、それとも様子を見ていた方がよいだろうか？
集会やキャンプに参加すべきだろうか、それとも体を休めた方がよいだろうか？
この働きに協力して、献金をささげるべきだろうか？
あの提案に賛成すべきだろうか、反対すべきだろうか？

まだまだいくらでも挙げることができます。でももうこれ以上、あげる必要はないでしょう。きっと、皆様お一人お一人の中に、神様の御心を求めたご自分の経験が思い出されてくるのではないのでしょうか。

2. 神は、自己責任で生きるように励ましている

私たちは、毎日の歩みの中での日常的な小さな事柄については、特に迷ったり、祈ったりはしません。今日職場に行くべきか、食事をすべきか、家族と会話をすべきか、などということについては、御心を求めるようなことはしません。そういうことは、ごく自然に対処する能力を与えられています。自分が判断していることに対し、間違っているかもしれないなどと思わずらうことはないと思います。ただ、普段あまり出くわさないような大きな問題になると、これまでの経験からすぐには決められないので、「神様の御心はどこにあるのだろう」と心配になるわけです。

ここで、10年ほど前に、私が経験したことを証しさせていただきたいと思います。結構、似たような経験をされた方もおられるのではないかと思います。御心症候群の典型的な事例のお話です。

相模原の教会の青年たちは、毎年恒例行事として、年末に新潟県にスキーキャンプに行っています。そのキャンプの引率者は、クロスロード・バプテスト教会の中野先生と決まっていた。ところが、10年ほど前のある年、中野先生は手を怪我され、牧師会で相談の結果、暇な私が代わりに引率するということになりました。

私は、30年以上前のことになりますが、一度だけスキーキャンプに参加したことがありました。ところが、その時は、とても恥ずかしい苦い経験をしてしまいました。その時に、金輪際スキーはすまいと決心しました。ですから、スキーキャンプに付き添うにしても、スキーをする気などさらさらなく、温泉にでも入り、ゆっくり本でも読んでいようと心に決めていました。

30人ほどが車6台に乗り込み、朝の5時前に出発しました。7時過ぎでしたが、最初のパーキング場所で朝食をとるため、レストランに入りました。私は能さんという方の前に座る羽目になりました。彼は高校の体育の先生で、私と同じぐらいの年齢でしたが、スキーのインストラクターとして参加している方でした。食事も終わりに近づいたころ、その方が突然、「中澤先生、私がスキーを教えますからね。頑張ってくださいよ」と言われました。その方の突然の熱意あふれた言葉に圧倒され、つい「ハア」というあいまいな返事をしてしまいました。彼が求道者だったということもあり、躓かせてはいけないという気持ちもちょっとはあったと思います。しかしそんなことよりなにより、不意を突かれて返す言葉がなかったというのが、本音でした。

それから私たちは皆、それぞれの車に戻りました。私は車に入るや否や、一生懸命祈り始めました。「神様、私はスキーをするつもりで参加したわけではありません。でも、能さんから声をかけられてしまいました。もしスキーはしないつもりだと言えば、彼を躓かせることにもなるかもしれません。しかし、もしスキーをして怪我でもしたら、それこそ大変なことになります。いったいどうしたらよいのでしょうか。」ひたすら祈りました。何となく、能さんに習いたいという気持ちもありました。でも、スキーはもちろん、服も帽子も、手袋も色眼鏡も何も持ってきませんでした。神様の御心はいったいどこにあるのでしょうか？ そうずっと祈り続けていました。

祈っても、祈っても、神様からの答えは来ませんでした。そして車は3時間走り、とうとう目的地のスキー場に到着してしまいました。車を降りた途端、リーダーの青年が近づいて来て、「はい、先生は一日券ですか、それとも三日券ですか？」と聞かれました。その時私はまだ、迷っていました。「神様からの答えはまだいただいていないので」と言いそうになりましたが、そういう返事をするわけにもいかず、一瞬返事につまってしまいました。そのとき突然、天からの啓示がありました。というより、一つの思いが浮かんできました。神様は「どっちでもいいよ、好きなようにしたら」と言っておられるのではないかと。そこで私は、「一日券をお願いします」とリーダーに答えました。

一日滑り終わると、スキーがすっかり面白くなってしまいました。結局、二日目も三日目も滑ってしまいました。本当に楽しいスキーキャンプでした。

このスキーキャンプの出来事は、私にとっては、それまでの考え方を一変させるようなすばらしい経験になりました。それまでは、神様は私たちの歩みに対しすべてのことまで決めておられる、というより、あるべき姿を御心として望んでおられる。それは、今の私にとっては隠されているので、聖書を読んだり、祈ったりして捜し当てなければならぬ、そう考えてきました。

ところがその時から、違った考えになってきました。ほとんどの事柄において、神様は、自分の責任において自由に選び取って歩むことを期待しておられるのだということが分かりました。このような人間の自由意志は、罪を犯す以前の人間には与えられていましたが、罪を犯してから後は、そういう自由はもはや奪い取られてしまったと考えていました。しかし、そうではありません。人間は自由意思を使い続けて、今日まで人間の歴史を作り続けてきたのです。ここで、二つのことを認めておかねばなりません。一つは、その自由意思を誤り続けて使ってきた結果、多くの罪の責任を背負わされた歴史になったということです。聖書は、そのことを「サタンが支配しているこの世」と表現しています。もう一つは、そういう人間の誤った意志の決断の連続にもかかわらず、神は主権をもってこの世を支配し続け、豊かな恵みを注ぎ続けてこられたという事実です。この二つは互いに矛盾しますが、両方とも真実なのです。

さらに、もう一つ、すばらしいメッセージがあります。このことを次の項で説明していきましょう。

3. 神はキリスト者に「被造物の管理」をゆだねている

東日本大震災が起こって 2 年半の時が経過しました。この震災による地震、津波、そして原発の災害の大きさは文字通り未曾有の衝撃的なものでした。私は、この震災をきっかけに、これまでずっと感じてきた一つのことを明らかにしようと決心しました。このような自然災害の問題は、従来の「伝統的な正統派の神学」では間に合わないということです。

以来、いろいろな集會に招かれる度に、「キリストの贖いの死は、創造時の人間に与えられた被造物の管理権を回復した」というヘブル人への手紙 2 章のメッセージを話してきました。私の友人牧師がこの考えを「被造物管理の神学」と名づけてくれたので、今後は、その言葉を使わせていただきます。

実は、この被造物管理の神学という福音理解は、今から 30 年ほど前、聖契神学校のヘブル人への手紙 2 章の講義中に与えられたものです。その詳しい内容については、今回の講演では深入りしません。しかし、茅ヶ崎の教会の皆様には、ぜひこの問題をお考えいただきたいと思っております。大野教会のホームページに、関連資料のいくつかを掲載してあります。関心のある方は、ご覧いただければうれしく思います。

ところで、「御心症候群からの解放」というテーマは、被造物管理の神学と深い関係があります。そこで、関係のある部分だけを特に取り出し、お話いたします。それは、そもそも人間がどのような者として造られたのか、それが人間の墮落によってどのようになってしまったのか、さらにそれが、キリストの贖いによってどのように回復されたのか、という問題です。このような問題がはっきり分かってくると、御心症候群からの解放が起こってくるはずで、この問題の核心部分を簡単に説明いたしましょう。

神は、人を「神のかたち」に創造され、地を支配するように命じました(創世記 1:27-28)。その神は、人間に自由意志を与え、神の戒めを守るようにとも命じました(創世記 2:15-17)。ところが人間は、神のその戒めを破り、神にそむきました(創世記 3:1-8)。その結果、人間は苦悩しながら与えられた使命を果たすことになりました(創世記 3:15-19)。

神は、このように墮落した人間を贖うため、救い主の到来を約束しました(創世記 3:15)。その救い主は、旧約聖書において度々預言されていましたが(創世記 49:10、申命記 18:15、Ⅱサムエル 7:12-16、イザヤ 9:6-7 など)、時至ってこの世界に御子キリストとして遣わされました(ガラテヤ 4:4-5)。キリストは十字架にかかって死に、全人類の罪を贖いました(Ⅰコリント 15:3)。キリストは三日目に墓からよみがえり、万物の支配権を受けました(マタイ 28:18)。神は、神の子であるキリスト者を「キリストとの共同相続人」として召されました(ローマ 8:15-17)。従ってキリスト者は、被造物に対する「王あるいは祭司」としての使命を果たす者になったのです(Ⅰペテロ 2:9、黙示録 1:6、5:9-10 など)

神はこの全宇宙を創造されたとき、自然法則を定め、その法則に基づいて、万物を保持されてきました。さらに神は、地球を人の住む場所として定め(イザヤ 45:18)、地球上の被造物を「人間とともに」管理しようと計画されたのです。人間は、神の管理権の一部を託され、神との共同管理者という名誉ある立場を与えられたのです。従って現在は、神は人とともに、被造物の自律的な法則の下に、共同の管理を果たそうとしているのです。

「支配」とか「管理」という言葉には、何となく高圧的な態度が伴っているような感じがします。人間社会では、上からの目線で支配するとか、全体を見て管理するというのが普通だからです。しかし神は、被造物に法則を与え、その法則の自律性を尊重されています。被造物を支配するといっても、その法則の制限内に置いて管理されているということに他なりません。決して、専制君主が意のままに物事を絶対的に動かしているという管理ではありません。むしろイエスは、反対のことを教えました。「神の国(神が王である、が原義)の統治原理」は、「仕える」ということにある、というのです。イエスは弟子たちに向かって次のように話されました。

あなたがたも知っているとおおり、異邦人の支配者たちは彼らを支配し、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。あなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、あなたがたのしもべになりなさい。人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。(マタイ 20:25-28)

イエスはここで、しもべとして仕えることこそ、神の国を統治する者の姿であると教えました。最後の晩餐の夜、イエスは弟子たち一人一人の足を洗われました(ヨハネ 13:1-17)。これが統治者イエスのお姿だったのです。ピリピ人への手紙 2:6-11 は、イエスがしもべの生涯をおくられたと述べています。今日の新約聖書の研究者たちは、この聖書箇所は初代教会で歌われた讚美歌集からの引用であると考えています。もしそうだとすると、初代のキリスト者は、イエスの生涯をしもべの歩みとして告白していたことになります。

このイエスの姿は、神の姿でもあります。ヨハネの福音書は、イエスが見えない神の本性を現わされたことを繰り返し述べています(ヨハネ 1:18、6:46、14:9-11)。神は御子を遣わしました。御子は仕える生涯を送りました。このお姿こそ、神の本性なのです。イエスは、しもべになられたからこそ、万物の支配者となられたのです。キリストの贖いによって、キリストとの共同統治者に召されたキリスト者の生き方とは、キリストに倣い、しもべとしての歩みをたどることなのです。キリストが仕えているので、そのキリストに寄り添って万物に仕えているのがキリスト者なのです。ペテロは、キリスト者の歩みについて次のように述べています。

何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。つぶやかないで、互いに親切にもてなし合いなさい。それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。語る人があれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。栄光と支配が世々限りなくキリストにありますように。アーメン。(I ペテロ 4:8-11)

ローマ人への手紙 8 章は、キリスト者がどのような人々であるかを明らかにしています。聖書中に、この箇所ほどキリスト者の立場を明快に論じているテキストはありません。まず、キリスト者とは「神の子」になった人々です。神の子になったとは、「神のいのち」すなわち「聖霊」を受けたということです(ローマ 8:14-16)。その神の子は、子である以上、「神の相続人」になったのです(ローマ 8:17)。相続人とは「神の遺産相続」を受けているということです。

神は死ぬような方ではありません。にもかかわらず、「遺産相続」という表現が出てくるのは、御父と御子の関係をより明確にするためでした。本来すべての被造物は神によって造られたもので、神のもので、神のものです。ところが、そのすべての被造物は御子が造り、御子のために造られ、御子によって保持されてもいます(コロサイ 1:15-17)。つまり、御子はもともと、御父の全相続財産にあずかるべき方だったのです。

ところが驚くべきことに、神は、キリスト者を「キリストとの共同相続人」という栄光ある地位に招かれたのです(ローマ 8:17)。相続権とは、「所有権」のことですが、それは具体的には「管理権」であり、「使用権」を指します。神が造られた被造物は、キリスト者のものなのです。キリスト者は、この被造物の所有者となったので、管理する責任を課せられたのです。この被造物は、キリスト者が復活の体を受けるのを待ち望んでいます。神による贖いを待って呻いているのです(ローマ 8:18-22)。キリスト者もまた、被造物と共に、完全な贖いを望みながらうめきの中にいます(ローマ 8:23-24)。キリスト者はどのように祈ってよいのか分からないので、聖霊がとりなしの祈りをささげてください。

さっているのです(ローマ 8:26-27)。それだけではありません。よみがえられた支配者キリストもまた、キリスト者のためにとりなしの祈りをささげてくださっています(ローマ 8:34)。

ここまでかなりの時間をかけて、聖書が説く「キリスト者像」を見てきました。このキリスト者像は、キリスト者の御心症候群からの解放というテーマを扱うには、不可欠だと思ったからです。では、「御心症候群からの解放」という本題に戻ることにしましょう。

4. 神の働きを見ながら、神の御心を知って歩む

神の御心が分からない、神の御心はどこにあるのか、どうしたらそれが分かるのか、と悩んでいる「キリスト者の御心症候群」の背景には、一つ的前提があります。その前提とは、私の生涯(一つ一つの歩み)のすべては、神が絶対的な権威をもって決めておられるという考え方です。この前提に立つと、キリスト者は、神の決めておられる事柄を祈りによって発見しなければならないとか、御言葉が与えられることによって確認できるとか、御心であれば平安が与えられるはずだ、と考えるようになります。

むろん、そのような方法で御心が分かれば、それはそれですばらしいことです。もしそういう経験をお持ちで、そういう信仰でいつも歩めるという方は、御心症候群にかかっているとは思いません。今のまま、信仰生活を続けていただければと思います。しかし、本当はそういうことだと思うけれど、自分にはそれがうまくゆかないと悩んでいる方々もおられるはずで、皆様がどのような状態かは分かりませんが…。これまでの牧師としての経験から申しますと、大多数の方々がこういう問題で悩んでおられるように思います。

では、このような悩みをもっている人はどうしたらよいのでしょうか。最もよいヒントは、イエス様の生き方にあると思います。ヨハネの福音書 5:17-23 を一緒に読んでみましょう。

わたしの父は今に至るまで働いておられます。ですからわたしも働いているのです。…まことに、まことに、あなたがたに告げます。子は、父がしておられることを見て行なう以外には、自分からは何事も行なうことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行なうのです。それは、父が子を愛して、ご自分のなさることをみな、子にお示しになるからです。また、これよりもさらに大きなわざを子に示されます。それは、あなたがたが驚き怪しむためです。父が死人を生きかし、いのちをお与えになるように、子もまた、与えたいと思う者にいのちを与えます。また、父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子にゆだねられました。それは、すべての者が、父を敬うように子を敬うためです。子を敬わない者は、子を遣わした父をも敬いません。

この記録から、イエス様が、父なる神様とどのような関係をもちながら働いておられたかを読み取っていただきたいと思います。まずイエス様は、「子は、父がしておられることを見て行なう以外には、自分からは何事も行なうことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行なうのです」と言われています。御子は、御父から離れて何かを行おうとはされませんでした。どのようなことでも、イエス様は父に倣い、父の働きを見ながら、ご自分もそれに合わせて働かれたのです。

ここには、キリスト者が見習うべき大切な真理があります。キリスト者も、父なる神とキリストの両方の働きを見ながら働くのです。キリスト者は、御父や御子から離れて働くことなどあり得ません。御父や御子が、キリスト者の身の回りでどのように働いておられるかをよく見ながら働くのです。それは、キリスト者が自分の置かれているその環境を御父と御子が備えてくださった場所と見ることに他なりません。別の言葉で言えば、自分が置かれた環境の中に、神ご自身の存在・働きを認めるということです。その環境がどのようにすばらしいものであっても、あるいは反対にどんなに悲劇的で困難なものであっても、それは変わりません。神はあらゆる状況の真ただ中に、支配者としておられるのです。そういう信仰に立たない限り、キリスト者としての歩みは始まらないのです。

あなたは、ご自身に関わるすべての事柄(趣味、富、余暇の時間の使い方など)、家庭、職場、教会などの関わりのすべてにおいて、その真ん中に神ご自身がその支配者として立っておられるのを見て、毎日の歩みを送っておられますか。もしかしたら皆さんは、箴言 3:5-6 や I テサロニケ 5:15-17 のみ言葉を暗礁聖句として覚えたことがあるかもしれません。この御言葉に立つことが、御心症候群から解放される、第一歩なのです。

次にイエス様が語られた、「子もまた、与えたいと思う者にいのちを与えます。また、父はだれをもさばかず、す

べてのさばきを子にゆだねられました」という句を考えてみましょう。この句は、御子は御父の命じられることを一言も違わないように注意深く歩んだというわけではないことを示唆しています。父なる神様はイエス様のなさることをすべて細かくお決めになっていたのです、イエス様はただその指示に従って歩んでいた、というだけではありませんでした。実際は正反対です。御父は、御子に大きな働きと責任を委ねています。イエス様は、ご自身の意思で働かれたのです。確かに御子は、御父に従順でした。といっても、すべての行動を御父の支持どおりに行った、というわけではないのです。イエスは、奴隷ではなく、子どもであったのです。

子どもに対する親の教育という問題を考えてみましょう。小さな赤ちゃんの時は、親は手取り、足取りで赤ちゃんを育てます。まさに 24 時間、親は子どもから目を離すことはできません。しかし、それは束の間のことです。子どもはすぐに成長します。やがて何でも自分でしがります。親から独立し、自分一人で生きようとします。親は、このような子どもの姿を見て喜びます。何でも親の言うことを聞かなければならないなどは考えません。小さなときとはかく、大きくなればなるほど子どもを信頼し、自分で考え、自分の責任で行動するよう励まします。自立した人間になることこそ、親の教育の最終目標なのです。御父や御子にとって、神の子であるキリスト者の成長・教育もまた、同じことなのではないでしょうか。

神様は、親や教師に比べるなら、より完全な教育者です。キリスト者を奴隷のようにではなく、一人一人を「大切なかけがえのない子ども」として育てているのです。それは、創造時だけのことではありません。墮落後の人間に対しても、同じ思いをもって人間に接しているのです。単にキリスト者に対してだけでなく、そうではない人々にも恵み深く取り扱っておられます(マタイ 5:45)。

イエスは、マタイの福音書 25:14-30 においてタラントの例え話を語られました。主人からタラントを任された 3 人のしもべたちはそれぞれ、さまざまな工夫をして商売することを期待されていました。彼らが何の仕事をもどのようにするかは、指示されませんでした。彼ら自身に任されていたのです。そのことは、主人としもべとが最終的な清算した時の言葉に表れています。だからこそ、それぞれの報いが異なっていたのです。同じ話をルカもまた伝えています。ルカの「ミナの例え話(ルカ 19:12-27)の方が、この点をよりクリアに教えています。

5. 神は聖書を通して御心を示してください

先生が牧師に召されたときに与えられた御言葉は何でしょうか。時々このような質問を受けます。それに対し私は、召命の御言葉はありません。ただ牧師になるのが一番よいと思ったから牧師になっただけです、と正直に答えることにしています。そのような返事を聞くと、ほとんどの方はびっくりされます。特別な選択をするときには、御言葉が与えられるはずだと思っているからです。そういう経験をしている方々もいらっしゃるでしょう。それはすばらしいことです。ただ、私にはそういう経験は今まで一度もありません。そしてそれでは不十分だと思ったことも一度もありません。

多くのキリスト者は、聖書には神の御心が啓示されているのですから、聖書から自分の歩むべき道を示されたいと望んでいます。聖霊は御言葉を通して語ってくださるはずだと信じているのです。これは、ある面で正しく、ある面で間違っています。聖書は、それぞれの時代に生きた神の民に対する「神の具体的なお取り扱いの記録」です。時代が変わり、人が変わり、状況が変わりますと、同じような問題に直面しても神様の対応は一様ではありません。従って、聖書の記録を表面的にとらえ、自分にストレートに当てはめるとおかしなことになります。あくまでも、聖書の出来事の背景にある神の定めた一般法則を見出すことが大切です。

聖書の舞台である古代中近東の世界は、現代とは大きく異なります。現代はまた、近代でも、中世でもありません。現代に生きるキリスト者は、現代という文脈の中で自分の問題と真摯に向かい合わねばなりません。聖書の一般的原則を模索しながら、直面している問題そのものをあらゆる角度から見直していかなければなりません。そのような努力をすること自体が、神の御心なのです。そこに、キリスト者の祈りがあり、聖霊の導きがあります。私たちが直面する事態は、すべてが応用問題なのです。

むろん、罪や自分の良心に引っかかることであるなら、躊躇してはいけません。祈って遠ざかることです。キリスト者にとって、悪に関わる余地は全くありません。ただ、グレーゾーンの問題がたくさんあります。そのような時はどうしたらよいのでしょうか。その時こそ、「被造物管理」という視点でとらえ直すと、対応の仕方が見えてきます。その

立場に自分を置きながら、聖書のどの原則に従ったらよいかを考えてみることです。

「管理」という語は、実に便利というか、役立つ言葉です。よい管理には、たくさんの失敗や試行錯誤はつきものです。多くのキリスト者は、「御心」という言葉を使った途端、失敗することはありえないと考えます。失敗した場合はすべて御心ではなかったということになります。しかし、そのような考え方がいつも正しいとは限りません。神様は、失敗を通して学ぶよう導かれることも多々あります。そのようなときは、失敗したら直ちに元に引き返せばよいのです。御心を知り、絶対に間違わない道を歩みたい、そういう気持ちはよく分かります。しかし神様は私たちの意思や判断力を尊重されます。しかも神様は、それらを正しく使えるよう、失敗を通して私たちを訓練されます。

自分の考えるべき責任を放棄して御言葉信仰に立つという姿勢は、この辺で卒業してはいかがでしょう。神様は私たちにより管理者になることを求めています。管理者であれば、最新の情報、またはあらゆる角度からの情報を利用します。ディスカッションも不可欠です。時に、セカンドオピニオンやサードオピニオンさえ用意する必要があります。あらん限りの選択肢をシュミレーションしてみることも大切になります。自分の分をわきまえ、他人の領域を侵さないことも大事です。歴史を学ぶことも、先輩のアドバイスを聞くことも、周囲のよい例や悪い例から学ぶことも努力せねばなりません。同じ間違いを神様は望んでおられません。管理者にとって、祈りは本当に大切になります。困ったときは、神様からの助けを率直に祈ればよいのです。祈りは、物事の真ん中にキリストがおられることを確信させてくださいます。神様の特別なみわざを引き出すことも祈りの恵みです。

ものごとを管理しているとき、判断に迷うことはつきものです。迷うことは、不信仰のしるしではありません。神様は私たちが迷っている中で、正しい選択ができるよう訓練をしておられるのです。とりあえず最善と思う道を選び、一歩踏み出してみることです。あるいは、今は判断をしないというのも選択肢の一つかもしれません。私は、ある方から、「責任を取れないことには首を突っ込むな」とアドバイスされた経験があります。それは管理という視点に立つとき、とても大切なことです。また、世の中に起こることは、自分にとってはどちらでもよいことがほとんどなのです。複眼思考で物事を見ると、簡単には決められないことがほとんどです。自分を神の位置に置き、世界の裁判官になることはやめた方がよいのです。It's not your Job! なのです。

どうぞ、簡単に聖書の言葉を引用し、神の御心が分かったような顔をしないでください。機械的に聖書の言葉を自分の状況に当てはめるのではなく、「被造物を管理する」という立場に立って、どのような聖句(あるいは聖書の原則)を適用したらよいかを祈りつつ判断してください。いたずらに心配することをやめ、聖霊の導きに信頼しましょう。神様は必ず、私にとって最善の道を切り開いてくださいます(ローマ 8:28)。そのような信仰を持ち続けて歩むことこそ、聖書の求めているキリスト者の生き方です。

結論

先日信幸牧師が、神様の導きはカーナビのようなものだと言われました。カーナビというのは、私たちが道に迷ったときでも、いつでも目的地に連れて行くよう誘導し続けます。ときどき、こちらは混んでいるのではないかとか、あちらの方が近道ではないかと考え、指示された道とは別の道を選ぶこともします。そのように別の道に迷いこんだとしても、カーナビは何一つ文句も言わず、決してあきらめることなく、迷っている私たちを目的地に連れて行くことなのです。迷やすい人間に対する神様の導き方は、確かにこのカーナビのようなものですね。自分の歩みを、絶えず修正しながら歩むのが、私たちの人生なのでしょう。しかし、たとえ目的地とは反対の方向に進んでいても、神様は決して私たちを見限ってしまうことはないのです。

最後に箴言の言葉を読んで、この講演を終わりたいと思います。

心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。(箴言 3:5-6)

この聖句は、「あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ」と教えています。そうです。今自分が歩んでいるその場所において、神様ご自身を認めることです。ところが、今は自分が神様のみ心の中にいるようにはとても思えない。もし神様が御心を示してくだされば、それには従いたいと思っているのだけれど……。そんな風に考えているキリスト者がたくさんいます。でも、それは間違いです。今の自分を神の御心の外に置いているからです。そうではなく、今自分は既に御心の真ん中に置かれている、そう信じることから始めるのです。その出発点に立つとき、神様ご自身があなたの道を切り開いてくださいます。そこに安んじることが信仰なのです。